

Title	ハイネとネルヴァル
Sub Title	Heine et Nerval
Author	大浜, 甫(Ohama, Hajime)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.57- 68
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0057">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0057</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ハイネとネルヴァル

大 浜 甫

## 一

一八三一年パリに亡命したハインリッヒ・ハイネはフランスの社交会や文学的サロンに出入りして、多くのフランス人と知り合いになるが、とりわけジェラルド・ド・ネルヴァルとは、文学上の関係にとどまらず、私生活の上でも親しくつき合ったらしい。ネルヴァルは『オーレリヤ』*Aurélia* 第二部第四章で、「あるドイツ詩人」を訪問し、そこで発作を起して病院に運ばれたことを記しているが、<sup>(1)</sup>彼が一八五三年デュボワ病院に入院したとき、ハイネが連絡者の一人として指名された記録も発見されている。<sup>(2)</sup>しかし二人の交友関係がいつ頃から始まったかは、多くの同時代人の証言や、その後の研究にもかかわらず、はっきりしないようである。ネルヴァルは、ハイネを知ったのは社交的な集り (*teuions mondaines*)<sup>(3)</sup> のことだと語っているそうであるが、その時期についてはふれていない。その時期を推測させる資料としては、二人の共通の友人であったアレクサンドル・ヴェューの回想があり、それによると、彼はネルヴァルに紹介されてユーゴー、バルザック、ミュッセ等を知った代りに、ハイネとネルヴァルのあいだを取りもった、とある。<sup>(4)</sup> ヴェューは

ネルヴァルが一八三八年のドイツ旅行のさいフランクフルトで知り合い、ネルヴァルのすすめでパリに移り住んだジャーナリストであるから、その証言を信じるならば、ネルヴァルがハイネと親しくなるのは一八三八年以後で、ハイネの亡命後かなり年月がたってからことになる。だが、一八二八年にゲーテの『ファウスト』第一部を翻訳し、一八三〇年には『ドイツ詩集』*Poésies allemandes*を発表して、ドイツ文学の翻訳家、紹介者として文壇に登場したネルヴァルが新進のドイツ詩人ハイネの存在を知ったのは、それよりはるかに早かったものと考えられる。フランスでハイネはすでに亡命以前に『ヌーヴェル・ルヴュ・ジェルマニック』*Nouvelle Revue Germanique* 誌に(一八三〇年)、また亡命直後には『グローブ』*Globe* 誌に(一八三一年)紹介されているし、ハイネ自身一八三三年には『ウーロップ・リテレル』*Europe littéraire* 誌に、『ドイツにおける文学の実状』*Staal* 夫人以後のドイツについて』*Etat actuel de la littérature en Allemagne, de l'Allemagne depuis Madame de Staal* を発表してゐる。

ネルヴァルの『ドイツ詩集』は、クロプシュトック、ゲーテ、シラー、ビュルガー等の詩を訳して、それにかなり長い序文をつけたものであるが、この序文は、彼自身スタール夫人の『ドイツ論』*De l'Allemagne* につけ加えるべきことはほとんどないとみとめている通り、全体の半分近くが『ドイツ論』からの引用であり、ここにはまだハイネの名はあがっていない<sup>(6)</sup>。ところでネルヴァルは一八三四年、当時ロマン派の出版社として有名だったランデュエルからハイネの詩の翻訳を頼まれたらしく、それにたいするネルヴァルの断り状が残っている。そのなかで彼は、ハイネの訳者として自分のことを考えてくれたことに感謝する一方、いまある大きな仕事(目 *travail enorme*)をかかえているためにそれは引き受けられないと言つて、代りに『ヌーヴェル・ルヴュ・ジェルマニック』誌のグザヴィエ・マルシエを推薦している<sup>(7)</sup>。なおこの「大きな仕事」とは『演劇世界』*Monde dramatique* 誌の創刊と推測され、ネルヴァルはこの年祖父の遺産約三万フランを手に入れ、意中の女優ジュニー・コロンをたたえることを一つの目的としてこの演劇雑誌の発行を思いたち、翌年五月に第一号を出すことになるが、これはわずか一年あまりでつぶれてしまふ。

その後しばらくのあいだは、ハイネとネルヴァルの関係を知る手がかりになるような作品も資料もいままでのところ発見されていない。そしてハイネの名がネルヴァルの作品に表われるのは、一八四〇年に発表された『ドイツ詩人集』*Les Poètes allemands* である。

これは、第二部をふくむ『ファウスト』の全訳の巻末におさめられたもので、ドイツ詩人を紹介した『概説』*Notices* もネルヴァル自身のことわっている通り大要はさきの『ドイツ詩集』の序文とほとんど変らず、詩集の方も新たに数篇がつけ加えられているにすぎない。<sup>(8)</sup>ただこの『概説』ではスタール夫人の『ドイツ論』からの引用は削られ、またゲーテに関する記述が短くなっている代りに、新たにウーラント、ケルナー等とともにハイネが簡単に紹介されている。そして翻訳ではウーラントの詩二篇、ケルナーの詩一篇が加わっているが、ハイネの詩は一つも訳されていない。しかしネルヴァルはその短い紹介のなかでもハイネを新しい詩人としてかなり高く評価しており、ハイネが「ゲーテの純粹に客観的な形式から脱け出す一方、シラーの行き方もとらずに、彼以前には知られなかった芸術的手法によって、诗情とメランコリーとイロニーにみちた彼個人の感情を、新たな革命的形式のもとに表現することができた」としている。そして「ハイネにあって普通とちがうのは、彼が、形式においては革命精神を表わしながら、その歌からは政治を完全にしめ出したことである」とも言っている。これは、特にフランス亡命後は「青春ドイツ派」の首領と見なされ、一時はサン・シモン主義にも接近し、革命詩人としての一面をもつハイネの紹介としては、かなりかたよったものといわなくてはならないだろう。だが、まだ『アッタ・トロール』*Atta Troll* (一八四三)、『ドイツ・冬物語』*Deutschland ein Wintermärchen* (一八四四)等の傾向的な作品が発表される前だったことは考慮に入れなくてはなるまい。ただ意外なのは、ネルヴァルがここでハイネ自身のドイツ文学にたいする知識をほとんど借りていないことである。ハイネの『ロマン派』*Die Romantische Schule* は『ドイツ論』*De l'Allemagne* と題されて一八三五年にランデュエルから出版されている。そしてこの『ドイツ論』<sup>(9)</sup>ははっきりスタール夫人のそれを補足、修正する意図をもって書かれ、それだからこそフランス語版と同じ標題がつけられたのである。ハイネの『ドイツ論』のネルヴァルへの影響をしいてあげるなら、それはゲーテとシラーについての部分だけで、ネルヴァルはここでゲーテがシラーと最大の文学的対照をなすとしているが、これはハイネの考えと一致し、さきの『ドイツ詩集』には見られなかった考えである。しかし、ゲーテとシラーが対照的な詩人であることは、ハイネを待つまでもなく、当時すでに常識になっていたとも考えられる。そして『概説』は前述の通り、スタール夫人からの引用こそ削られたものの、大要は夫人の『ドイツ論』にもとづくさきの『ドイツ詩集』の序文とほとんど変っていない。書き加えられた部分でも、

例えばウーラントをゲーテやシラーとことなる「新しい方向を切りひらこうとした最初の人」として評価しているが、ハイネが『ロマン派』第三章でウーラントを始めとするいわゆるシュワーベン派をかなり手きびしく批判し、それがもとでシュワーベン派との論争が始まり、彼はついにドイツで出版を禁止され、そのため『密告者について』*Über den Denunzianten* (一八三七)、『シュワーベン法典』*Der Schwabenspiegel* (一八三八)を書くにいたったことは有名であり、この点でネルヴァルはハイネと考えをことにしており、当時はまだハイネの『ドイツ論』を読んでいなかったのではないかと考えられる。

同じ一八四〇年十一月、ネルヴァルは旅先のブリュッセルからハイネに宛てて手紙を書き送っているが、これがネルヴァルからハイネ宛ての現存する唯一の書簡で、当時の二人の関係、またネルヴァルのハイネの詩の訳について知る上で貴重な資料である。<sup>(10)</sup>このなかでネルヴァルはハイネにある出版社から五十フラン借りて送金してくれと頼み、その手続きをこまごまと指示している。そして追伸で、ゴーチエに会ったら自分がいつパリに帰るか伝えてほしいと書いている。ゴーチエはネルヴァルとはリセ時代からの親友であり、そのゴーチエがパリにいると知りながらなぜネルヴァルがハイネに送金を依頼するようになったのか、そのへんの事情はわからないうが、とにかくこの頃にはネルヴァルとハイネが通り一っぺんなつき合いでなく、きわめて親密になっていたことが知れる。またハイネの詩の翻訳については「余暇を利用してできるだけやっていっているがまだ三分の一ほどしか終っていない」ことをしらせ、だが「パリに帰ったら大いに仕事をして二ヶ月あまりで完成する予定」であると書いている。そして、「ときに理解はできても表現するのがひじょうにむずかしい場合があるので、意味のあやしい箇所は見てもらうつもりでそのままにしてある」とも報じている。もともとネルヴァルは、軍医だった父親から手ほどきを受けた以外、正式にドイツ語を学習したことはないらしく、ドイツ語の学力が大したものでなかったことは彼自身たびたび父親宛の手紙で告白しており、ドイツ文学の翻訳にもいくつか誤訳のあることが研究家によって指摘されている。<sup>(11)</sup>

それはとにかく、こうしてネルヴァルのハイネの詩の訳は一八四〇年にはかなり進捗していたはずなのに、それが発表されるは一八四八年のことで、その間にネルヴァルの生涯には、精神病のための入院(一八四一年)、ジュニー・コロンの死(一八四二年)、東方旅

行（一八四三年）等、きわめて重大な事件が起きている。

## 二

ハイネの詩の翻訳は一八四八年、『ルヴェ・デ・ドウ・モンド』*Revue des Deux Mondes* の七月号と九月号に発表される。七月号には『北海』*La Mer du Nord*（*Die Nordsee*）中の十六篇ほか二篇、九月号には『挿曲』*Intermezzo*（*Lyrisches Intermezzo*）ほか二篇の詩が、それぞれかなり長文のハイネ論とともに掲載されている。これらの詩はさらにネルヴァル訳の他の二十篇ほどの詩とともに一八五五年ハイネ詩集『詩と伝説』*Poèmes et Légendes* に収録されるが、ハイネはその序文で、一八四八年三月、ネルヴァルが毎夜訪れ、二人で翻訳に没頭したことを回想しているから、<sup>(12)</sup> さきにネルヴァルが手紙でいつていたことが実現し、この訳は原作者の協力をえたわけである。ところでこの七月号のハイネ論が、実は大部分ゴーチエが書いたものにネルヴァルが手を入れたにすぎないことが、ゴーチエの自筆原稿の発見によって、今日では明らかにされている。<sup>(13)</sup> また九月号の文章もその文体からみてゴーチエが協力していると考えられる。ゴーチエは一八四一年、ハイネがザロモン・シュトラウスと決闘したときも、例のマチルデと正式に結婚したときもその立会人になっているほどで、ドイツ語の知識はともかく、ハイネとはごく親密だったらしい。一方彼は前述の通りネルヴァルとはリセ以来の親友であり、二人は仕事の上でこれ以外にも協力したことがあるらしい。実際七月号のハイネ論には、ハイネを「ドイツの月光のやわらかな着い光で銀色に色どられた十八世紀の懐疑家」*un sceptique du dix-huitième siècle, argenté par les doux rayons bleus du clair de lune allemand* と定義するような、いかにもゴーチエ好みのはでで視覚的な表現が見られる。しかし一方、誌上には訳出されなかった詩もいくつかその内容が紹介されているところからみると、この『ハイネ論』はネルヴァルが材料を提供してゴーチエに書かせたと考えるのが妥当だろう。そうすると、ここにネルヴァルがなぜ自分だけで『ハイネ論』を書かなかったのかという問題が生じる。

ネルヴァルは自分の恋する女優ジュニー・コロンの場合にもゴーチエに頼んでその肖像（*portrait*）を書いてもらったことがある。

ネルヴァルとジュニーの関係については同時代人の証言にもくいちがいがあり、不明な点が多いが、彼とアレクサンドル・デュマとの合作になる芝居『ピキロ』*Piquillo* に彼女が出演した（一八三七年十月）ことから、二人の間はかなり進展し、いわゆる『オーレリヤ書簡』*Lettres à Aurélie* によれば、少くとも一夜を供に過ごしたこともあるらしく、この関係はジュニーが一座のフルート奏者ルプリュスと結婚するまで続いたものと考えられている。さきに述べたようにネルヴァルが遺産をつぎこんで『演劇世界』を創刊したのも、一つには誌上で彼女をたたえるためだったといわれる。ところが実際には、同誌の第二号にのった匿名の一短文がネルヴァルの書いた唯一のジュニー評と推定されるだけで、<sup>(14)</sup> それもごく平板で、『シルヴィ』*Sylvie* 第一章によればただその舞台姿を見たために毎夜劇場に通いつめた女優のために書かれたとは思えないような、一女優評にすぎない。これにたいしてゴーチエがネルヴァルに頼まれて書いた記事は『フィガロ』*Figaro* 紙の一八三七年十一月九日号に発表されるが、この方はゴーチエらしく、ジュニー・コロンの美しさをきわめて絵画的な表現でたたえている。これについてゾルジュ・プーレは、神話的な女性を求めるネルヴァルは現実の女優に接近すればするほど直接彼女に話しかけることも、彼女について語ることもできなくなってしまったのだ、と解釈している。<sup>(15)</sup> ネルヴァル自身、『シルヴィ』のなかで「私」の求めていたのはイマージュであると書いており、その点でプーレの解釈はネルヴァルの女性観の本質をついたものといえよう。ただここで問題になるのは、このゴーチエの記事が『ジュニー・コロン——ルプリュス夫人』*Madame Jenny Colon—Lepus* と題されていることである。彼女がルプリュスと正式に結婚するのは一八三八年四月であるから、これは一見奇妙に思えるが、結局、ゴーチエがその記事を書いた頃にはジュニー・コロンはすでに事実上のルプリュス夫人であり、そのことは一般に知れわたっていたのだと考えるより仕方がない。そうだとすれば、ネルヴァルと彼女との関係は当時すでにある種の破局を経っていたはずであり、ジュニーは彼にとって失われた女であったことになる。この失恋の痛手が、ネルヴァルにジュニー評を自分では書かないでゴーチエに依頼させた一つの理由ではないだろうか。

『ハイネ論』の場合にもこれと似た事情があったとは考えられないだろうか。ハイネは従妹のアマーリエを、ついでその妹のテレゼを愛するが、二人とも彼を見捨てて他の男に嫁してしまい、ハイネはこの失恋の悲しみを『歌の本』*Buch der Lieder* におさめられ

た多くの詩で歌っている。そしてハイネはネルヴァルにこの昔の失恋の傷は決してまだ癒えていないと一八四〇年に告白したと伝えられ、<sup>(16)</sup>ネルヴァルは自分とよく似たこの体験を本人の口から直接聞いて知っていたと考えられる。九月号の『ハイネ論』では「挿曲」の主題を説明して、それは「はじめ詩人に愛されながら、ある婚約者か別の金持の愛人のために詩人を捨てた娘」であるとし、さらに「その女は恋人の魂を掴んでしまうと、子供が蝶を颯のように、あらゆる苦しみをその魂になめさせる」と続け、その苦しみを歌った詩の「一節一節は詩人がいれんする手で自分の心臓から絞り出した血の一滴である」といつている。これを読めば、ネルヴァルが彼自身の体験をハイネのそれと引きくらべて、ハイネとその恋愛詩に単なる共感以上のものを感じていただろうことがわかる。ネルヴァルがハイネを自分の分身とまで見なしていたことも多くの研究者によって指摘されている。そして、ネルヴァルのハイネ宛の手紙がブリュッセルで書かれていることも偶然とは思われない。先に引いた通り、彼はこの手紙のなかでハイネの詩の翻訳のむずかしさを訴えているのだが、ネルヴァルがそのときブリュッセルに旅行したのは、そこでジュニーの出演する『ピキロ』の再演を見るためであり、実際に彼はそこでルプリュス夫人ジュニーと再会したらしい。つまり、ここでネルヴァルは一度失われた女性とふたたび交渉をもつことによって、直りかけていたかもしれない傷をいっそう深くしてしまっていたのではないだろうか。『オーレリヤ』第一部第二章ではこのときのことをこう語っている、「……ある日、私が彼女の加わっている集いのなかにいあわすと、彼女が私の方にやってきて手を差し出すのを見た。このような行為と、彼女の挨拶に伴う深く悲しげな視線とはどう解釈すべきなのだろう？ 私はそこに過去への赦しが見とれるように思った」。そしてこのあと、パリに帰った私は、街頭で「蒼白な顔色の、目のおちくぼんだ、オーレリヤの顔立をしているように思われる女」を見かけ、彼女の死か、あるいは自分の死を予感し、さらにその夜、その予感を確認するような奇怪な夢を見る。<sup>(17)</sup>ネルヴァルが「現実生活への夢の氾濫」*épanchement du songe dans la vie réelle* と名づけた精神病の最初の発作を起こして、精神病院に入れられるのは、ブリュッセルからパリに戻った直後の一八四一年二月のことであり、ブリュッセルでのジュニーとの再会が、これと無関係とは思われない。そして、ブリュッセルで『ピキロ』の上演されるのを待ちながらハイネの詩を訳していたときも、すでにかなり不安定な精神状態にいたことが想像される。だから、彼が翻訳がむずかしいと訴えるのも、ただ語学上の問題だけでなく、そ



こにはもっと内面的な精神的障害とでも呼べるものがあつたからではないだろうか。ハイネの詩はネルヴァルに失恋の痛手をあまりにも生々しく呼びさまし、ネルヴァルはハイネに親近感をおぼえればおぼえるだけにその詩が訳しにくくなり、結局は『ハイネ論』も自分で書けなくなって、ゴーチエに頼んだのだ、とは考えられないだろうか。そしてこのことがまた、一八四〇年代に始めていたハイネの詩の翻訳の発表を一八四八年までのばすことになった理由の一つではないだろうか。マクシム・デュ・カンの回想によれば、ネルヴァルはジュニーとの恋についてゴーチエから質問されると、ハイネのことを借りて「希望もないのに二度も恋をする男はばか(Fou)であり、ばくはそのばかだ。空 (ciel) も太陽も星もそれを笑っている。ばくもそれを笑っている。ばくはそれを笑い、そしてそれで死ぬのだ」と答えたそうである。<sup>(18)</sup> このことはネルヴァルの訳した詩のなかにはなく、いままでその出典も明らかにされていなかったようだが、実際に『帰郷』*Heimkehr* 六三の一節であつて、テレゼとの恋を歌った詩とされている。なお、詩の原文はデュ・カンの引いているフランス語とはいくらかちがつている。

.....

Aber wer zum zweiten Male

Glücklos liebt, der ist ein Narr.

Ich, ein solcher Narr, ich liebe

Wieder ohne Gegenliebe;

Sonne, Mond und Sterne lachen,

Und ich lach mit—und sterbe.

## 二

右に述べたことはネルヴァルの訳詩のものにも影響しているように思われる。例えば『挿曲』十六(原文では十七)は、恋人が自

分を捨てて他の男にとつぐとき、自分の心に向つてその裏切りをうらむな、苦痛にたえ、彼女のすることを赦してやれといいかす内容の、やはりアマリーエ詩篇の一つに数えられる詩であるが、ネルヴァルはその第一節を「泡立つ波のなから現われ出るウェヌスのように、ぼくの恋しい人はその美しさで光り輝いている。今日は彼女の婚礼の日だから」*Comme Vénus sortant des ondes écumeuses, ma bien aimée rayonne dans tout l'éclat de sa beauté, car c'est aujourd'hui son jour de noces* と訳してゐる。ところがこの「今日は彼女の婚礼の日だから」にあたる部分は、原文では「彼女は他の男の選はれた花嫁であるから」*Denn sie ist auskorene / Bräutchen eines fremden Mann* であり、翻訳としてはまちがひとはいえないまでも、かなりニュアンスのちがう自由な訳といえる。これについてある研究家は、原文はあまりにも苦しい思い出をネルヴァルに呼びさますため、彼は表現を和けたのだらうと推測している。(19) つまり「他の男の花嫁」はネルヴァルにルプリュス夫人となつたジュニーをあまりにも生々しく思い起させるため、彼はその表現を避けた、というわけである。

同じ『挿曲』の五〇（原文では五六）では、毎夜夢にみる恋しい「君」が「はくにひそかにあることはをささやき、イトスギの花束を差し出す。だが目をさませば、花束は消え去り、ぼくはそのことを忘れてしまつてゐる」*Du sagst mir heimlich ein lises Wort / Und gibst mir den Strauss von Zypressen. / Ich wache auf, und der Strauss ist fort. / Und das Wort hab ich vergessen* と歌われてゐるが、ネルヴァルは、喪の象徴である「イトスギの花束」を「白バラの花束」*un bouquet de roses blanches* に変えて、やはり表現を和らげている。そしてさらに「そのことを忘れてしまつてゐる」を「そのことを忘れたら」*Je veux oublier ce mot* とつてしまつてゐる。これは明らかに誤訳であり、実際この部分を誤訳として指摘している研究家もいる。(20) だが、ネルヴァルのドイツ語の知識がどれほど頼りないものであつたにしても、まさか現在完了の形を知らなかつたとは考えられず、したがつてこの誤訳には彼なりの心理的理由があつたと思われぬ。そして、一八四一年以後、夢と現実の境をさまよひ続け、ついに最後まで「第二の人生」*seconde vie* である夢からさめきることはできなかったネルヴァルにとっては、夢のなかで恋人からささやかれたことは、忘れたいと願つても忘れることのできないことばであつたにちがいない。つまりハイネの場合は、失恋の痛手は一生忘れることのできないものではあつても、過去

の思い出であり、「若い日の悩み」Jungen Leiden であって、彼はそれからある程度立ち直ることができたはずである。だから彼は、その恋を主題にして、かなり客観的に、ときにはユーモアや皮肉をまじえながら歌うこともできたのだろう。だが、ネルヴァルの場合は、一生ジェニーの思い出からのがれることができなかったというより、それは歲月とともにますます彼につきまとい、現実での失望は彼を夢の世界に追いやり、ついに最後の幻想的な作品『オーレリヤ』でジェニーを神格化させるにいたったのである。ネルヴァルは『ハイネ論』のなかで、ハイネがかつて愛した女性がハイネにとっては「ペトラルカにとってのラウラ、ダンテルにとってのベアトリ―チェ」ce qu'est Laura pour Pétrarque, Beatrice pour Dante であつたとしているが、一方『オーレリヤ』第一部第一章では、「私は現世紀の普通の女をラウラやベアトリ―チェのような女に仕立てあげてしまった」Je me suis fait une Laure ou une Beatrice d'une personne ordinaire de notre siècle と告白しており、このたとえばハイネとその従妹たちとの場合よりも、ネルヴァル自身とジェニーの場合によりよくあてはまるといえよう。

ハイネのネルヴァルへの影響もしくはネルヴァアネのハイネからの借用についても、いくつかの事実が指摘されている。例えば『幻想詩篇』*Chimères* の最初の十四行詩『廢嫡者』*El Desdichado* (一八五三) に表われる「黒い太陽」*soleil noir* は、すでに『北海』第一部の『難波者』*Le Naufragé* (*Der Schiffbrüchige*) 中の schwarze Sonne の訳語として用いられている。むろんネルヴァルにおける「黒い太陽」のイマージュはアルブレヒト・デューラーの幻想的な版画『メランコリヤ』に見られる彗星や、錬金術の用語である「暗い太陽」*soleil ténébreux* 等から総合されたものと考えられ、単なるハイネからの借用とはいえないが、やはりそれと無関係ではないだろう。<sup>(22)</sup> 同じ用語だけを問題にするならば、やはり『廢嫡者』の「墓穴の闇」 *NUIT DU TOMBEAU* は、『夢の絵』*Trambilder* の二(翻訳では『夢』*Rêve*)に出づける dunkle Grabesnacht の訳語として使われていることも、当然指摘されるべきであろう。また、単にそうした言い廻しだけでなく、イマージュの点でも、例えば『オーレリヤ』第一部、第五章で「私」が夢にみる、白衣を着た人たちの住む光り輝くふしぎな都市は、『北海』第一部の『平和』*La Paix* (*Frieden*) に描かれている「清らかでよく反響する通りを白衣の人たちが遊歩する」durch die reinen, hallenden Strassen / Wandelten Menschen, weisse gekigte mährosiの街から借りたイマージュとされて

(23)  
いる。

ネルヴァルが、例えばユーゴーのようにゆたかな想像力にめぐまれた詩人ではなく、創作にあたっては、自分自身の体験なり、読書の記憶なり、なんらかのもと (source) を必要としたことはいまや定説であり、戦後のネルヴァル研究は主としてこの方面に向けられ、実際に多大の成果をあげてきた。だが一方、とくにネルヴァルの作品は象徴派の先駆として当然多義的であり、一つの表現、一つのイマジユをだれに負っているかを発見しただけではその作品を完全には解明しえないことも否定できない。ネルヴァルが、この「脱走したロマン主義者」romantique détroqué と自称する象徴派詩人の先駆者ハイネに負っているところは大きいだろう。だが、そこには単なる影響や借用があったというより、ネルヴァルがハイネの人と作品から直接学びとったことが、ネルヴァルに自分のうちにあつて不分明だったものをより明確に意識させた、というべきだろう。だからネルヴァルのハイネ論はかなり主観的、一面的であり、その翻訳も『歌の本』を中心とする初期の作品に限り、社会的、政治的作品は全くとりあげていない。そしてそのことはネルヴァル自身がよく承知しており、『ハイネ論』では、ヨーロッパがまだ燃えている現在 (『ルヴュ・デ・ドゥ・モンド』誌にこの記事が発表されるのは、二月革命直後の一八四八年七月である) 単なる詩 (poésie) に関心を抱くこと、そしてかつては「青春ドイツ派」の首領であった作家の革命的な歌ではなく、その最も超然としたバラード、最もおだやかな詩を翻訳することは、いささか勇氣のいることである、とことわっている。そしてこのことがネルヴァルを、公平で語学的に正確なハイネの訳者たちよりもすぐれた訳者、紹介者にしたともいえよう。ハイネ自身『詩と伝説』の序文で、ジュラルルの訳文はまねできないようなところよい純粹さをもって流れたし、彼は大きくしてドイツ語を解さないにもかかわらず、ドイツ語で書かれた詩の意味を、このことを一生研究した人以上によく推察する (Deviner) ことができた、といつて、ネルヴァルの訳業をたたえている。

註1 Gérard de Nerval, *Œuvres I, Pléiade*, 3<sup>e</sup> édition, 1960, p. 398.

2 *Ibid.*, pp. 1438—1439.

3 J. Dresch, *Heine à Paris*, Didier, 1956, p. 50.

4 *Œuvres I*, p. 1372.

